

## 異文化交流、歴史評価へのマトリックス履歴書表現の適用

大野 邦夫\*, 西口 美津子\*\*

起業家人材の育成の研究で用いてきたマトリックス履歴書の表現を、歴史過程の評価に用いることを試みた。マトリックス履歴書は、時系列情報を構造化して記述可能なので、歴史過程のパターンを分析するために活用可能ではないかと思われる。本報告では、安土桃山時代、明治維新、戦後の民主化という3種類の時代を取りあげ、日本が西洋文化を受容した過程の分析を試みた。併せて、各々の時代に活躍した千利休、福沢諭吉、高崎達之助についてもマトリックス履歴書を紹介し、その時代の歴史のマトリックス表現に関連付けて考察した。

## Matrix CV Format Application to Intercultural Communication and Historical Viewing

Kunio OHNO\*, Mitsuko Nishiguchi\*\*

Historical process has been studied through Matrix CV which has already been applied to human resource development as entrepreneurs. Through matrix CV, sequential information can be organized to structured format, then that enables to analyze historical patterns. This paper describes the analyses of Azuchi-momoyama era, Meiji restoration and the democratization era of post WW2. In addition to the analyses, personal matrix CVs of Sen Rikyu, Fukuzawa Yukichi and Takasaki Tatsunosuke have been introduced, and the relationship to the history has been considered.

### 1. はじめに

マトリックス履歴書は、当初はエピソード履歴書と共にシニア人材のスキル記述のフォーマットとして工夫された[1]。だがこのフォーマットを歴史上の人物のスキルの分析評価に適用を試みたところ興味深い結果が得られたので[2]、その後起業家人材育成のための人物評価を目的に多様な人材のスキル分析に用いてきた[3]。さらにマトリックス履歴書から抽出された起業家として期待されるスキルとエドガー・シャインのキャリアアンカーの概念を関係付けて、起業家育成モデルの提案を試みた[4]。

最近、異文化コミュニケーション学会で活動する機会があり、人物評価のさらに上位概念としての異文化評価、歴史の評価にマトリックス履歴書による表現の考え方が活用できないかと考えている。異文化評価の客観的手法として、全世界のIBMの職員を対象としてアンケート調査を行い国ごとに比較したヘールト・ホフステードの研究成果が知られている[5]。これは極めてユニークな手法ではあるが、世界各国のIBM社員というフィルタを通した相对比较なので必ずしも一般的とは言えない。私どもが提案する手法は、局所的な手法に過ぎないが、ホフステードの方法を部分的に検証するために有効ではないかと考えられる。

本報告では異文化交流の評価の試みとして、日本と西洋との文化交流について、安土桃山時代、明治時代、戦後の民主化の3種類の時期を取り上げマトリックス履歴書の考え方を歴史分析に適用することを試みる。その前に、それ

ぞれの時代に生きた、歴史の代表者のような人物のマトリックス履歴書を通じてその時代背景を紹介する。

### 2. 歴史上の人物のマトリックス履歴書

#### 2.1 時代背景を代表する人物

特定の時代背景を代表する人物の選定は難しい。最高権力者は時代を代表する人物には違いないが、極めて特異な人物であり、人々の生活のような時代背景まで含めて代表するとは言い難い。時代背景まで含めて代表する人物は、その時代の権力者から庶民や貧民に至る人々と関わり、多様な状況の問題を知りつつそれに直面し解決に尽力する人物であろう。言わばエルゴート仮説のように、結果的にアンサンブルとなるような多様な経歴を生きた人物と言えるのではあるまいか。

私どもはそのような生き方を、蟹の横這い人生と呼んでいる。日本社会は中根千枝が警えるように大多数の人が立身出世を目指す「たて社会」であるが、敢えてそれにとらわれることなく、横ばいを行うような異色の知性あふれる人材である。それは権力への批判という視点と共に旺盛な好奇心によるものである。そのような人物は、基本的に多様性に寛容で異文化に興味を持つと思われる。そのような人物の例としてここでは各々の時代に適合すると思われる3名の人物を紹介する。

#### 2.2 千利休

安土桃山時代の時代背景を代表する人物として、千利休を取り上げる。彼は日本文化を代表する茶の湯の創始者であるが、その人生は波乱に満ちていて興味深い。図1に彼のマトリックス履歴書を示す。

† (株) モナビITコンサルティング  
Monavis IT Consulting Co. LTD.

†† 福島工業高等専門学校  
Fukushima National College of Technology

### 千利休のマトリックス履歴書

1522~	1538~	1569~	1582~	1591
幼少期 堺の商人の子として生まれ 北向道陳・武野紹鷗に師事	独立期 自由で挑戦的な環境 技の獲得	信長の時代 立身出世を目指す 技の発展	秀吉の時代 権力への接近 わび茶の創造	秀吉との対立と切腹 権力に服従しない結果 茶における人間の平等
	茶の湯の改革に取り組む 堺の南宗寺に参禅 京都の大徳寺に参禅	信長の好みに合う 地域人脈の拡大 中央人脈の拡大	わび茶の創造 大徳寺の像作成	大徳寺の像への批判
		信長が堺を制圧 信長の前で茶を立てる 信長に茶頭として雇われ 本能寺の変	権力への接近 権力への密着	権力は服従を要求
			豊臣秀吉に仕える 大坂城内に茶室を開く 正親町天皇への禁中献茶 黄金の茶室の設計 草庵茶室の創出	秀吉への不服従と対立
				堺で監居を命じられる 秀吉の命で切腹

図1 千利休のマトリックス履歴書

利休は堺に生まれ育ったが、当時の堺は室町から戦国の混乱した時代において自由な活気ある環境の港町であった。その結果商工業が発展する素地があった。ポルトガルからの鉄砲の伝来、スペインからのキリスト教宣教師の来日といった新しい空気の中で利休は多感な才能を茶の湯において開花させた。彼の才能は時の権力者であった織田信長、豊臣秀吉に認められる卓越したものであった。しかし、最後に秀吉に切腹を命じられてその生涯を閉じた。秀吉は晩年は身勝手な権力者であり、その時の気分で女性に手を出したり人を処刑したりしたようである。若桑みどり

がローマ法王庁の記録文書等を駆使して執筆した“クアトロ・ラガツィー~天正少年使節と世界帝国”に利休の最後に関する記述も含まれている[6]。利休の高弟にはキリシタン大名の高山右近がおり、秀吉が右近のキリシタン教の棄教を勧める書状を利休に託して説得させようとした経緯が書かれている。右近は利休の改宗の勧めには応じず、利休自身が右近の言葉に感じ入り俗を離れて黙想するキリシタン教と侘び茶の和敬静寂の境地との共通性を認識したとの記述がある。

### 2.3 福澤諭吉

#### 福澤諭吉のマトリックス履歴書

1836	1854	1855	1858	1860	1861	1862	1867
1	19	20	23	25	26	27	32
中津時代 神仏への反逆精神 武道に秀でる 書籍を読む	軍事への関心	批判精神 写本のスキル	好奇心 塾長に執權	米国社会の把握 軍事力の認識 米国書籍の購入	欧米制度の把握	欧米制度の啓蒙 香港での植民地文化	政治への距離
	長崎遊学 オランダ語の習得 砲術図面の習得 薩摩の関係者と面識	翻訳のスキル 製図のスキル	語学への興味 佐久間象山の砲術学	英語訳スキル 軍事力の認識	欧米技術力の把握	薩英戦争の把握	
	適塾 築城学の写本と翻訳 化学実験を行う 物理・電気も学ぶ	科学的精神	蒸気船の知識	欧米技術力の把握	「西洋事情」	「学問のすすめ」	
		江戸 蘭学塾を開設 佐久間象山の砲術学 英語の習得	軍事力の認識 英語の活用	蘭学塾から英学塾へ	香港での植民地文化 幕府公文書の翻訳	慶応義塾の開設	
			渡米 咸臨丸への乗船 米国社会の把握 木村拱津守との親交	欧米文化の把握 勝海舟との反目	「西洋事情」	経済学の講義	
				英学塾 ウェブスターの活用 「増訂華英通語」出版 幕府公文書の翻訳	翻訳スキル 訳語の整備 幕府外交文書の翻訳	幕臣として 文久遣欧使節に随行 香港での植民地文化 ロンドンの万国博覧会 欧州の技術制度把握 「西洋事情」執筆 幕府外交文書の翻訳 訳語の整備	明治維新 慶応義塾の開設 経済学の講義 新政府出仕を断る 「学問のすすめ」

図2 福澤諭吉のマトリックス履歴書

明治維新の前後に活躍した西洋文化の受容に関する関係者として福澤諭吉は興味深い。福澤は、慶応大学の設立者

として有名であるがそれは晩年のことであり、彼が若かったころの経験が重要であろう。彼は“福翁自伝”という伝記

を書いているが、その好奇心に満ちた自由な生き方に興味をそそられる。マトリックス履歴書を図2に示す。

福澤のマトリックス履歴書については、すでにデジタルドキュメント研究会で紹介しているので[2]、詳細はそちらを参照していただきたいが、西洋文明に対する考え方について若干補足する。幕末のころ既に蘭学や洋学についての書籍やそれを習得した横井小楠や佐久間象山のような学者が存在し、好奇心の強い有能な若者はそれに憧れたり関心を抱いていた。福澤もその例にもれず中津藩を飛び出して長崎に向かったが、長崎では蘭学を学ぶと共に培ったスキルで翻訳の仕事をこなしている。その後も適塾、江戸でオランダ語と英語を習得し、そのスキルを生かして咸臨丸で渡米し、米国をつぶさに調査見学しているが、これは彼の好奇心のなせる業であろう。

彼の場合は、組織の中で立身出世するのではなく、好奇心に基づく科学的精神で、新たな世界を知りその世界に自らの思想で関わる姿勢をライフワークとして貫いている。その姿勢が組織に依存しない起業家としても相応しいとい

うのが先の報告の趣旨であった。なお、福澤の場合は、西洋文化に関心を持って森有礼のようにキリスト教には心酔しなかった。この立ち位置は伊藤博文とも同様であるが、伊藤博文は権力指向の立身出世主義者であった。福澤の立場はキリスト教の立場でなく、権力者の立場でもない是々非々の異文化交流者の立場と言える。知識社会学者のカール・マンハイムは、歴史に貢献する人物は、特定のイデオロギーを推進するのではなく、イデオロギーを超えた歴史的な展望を抱く知識人（浮遊するインテリゲンツィア）であると説いているが[7]、福澤にはその素地があると考えられる。

## 2.4 高崎達之助

戦後の民主化は、日本人が行ったのではなく占領軍が行った改革であった。そのために今でもその評価が割れていて国民的な合意が形成されていない状況にある。その時期の時代の背景を代表する人物として高崎達之助を取りあげる。マトリックス履歴書を図3に示す。彼のマトリク

### 高崎達之助のマトリックス履歴書

1885~	1902~	1906~	1917~	1937~	1945~	1954~
幼少時 大阪府高槻市で誕生 神社の狛犬の脚を折る 政治地理の授業での決意 卒業時には首席	7~ 水産講習所 日比谷焼打事件参加 水産事業をライフワークに 自学自習の習慣	21~ 東洋水産 関西板前の文化 挑戦的性格 現場指向で舌の練磨 他者に抜きんでる決意	32~ 東洋製罐 関西商人の文化 辺境への関心 世界における米国の認識 経営者への意志	52~ 満州へ 軍部との対立 鮎川義介の後任	60~ 敗戦処理 在留邦人の連帯への貢献 敗戦でも毅然たる態度 日本の立ち位置の把握 残留日本人の代表へ	69~ 政界へ 共産圏との交渉 経営者としての評価
	水産講習所に入学 缶詰工場を指導 翻訳で副収入	水産事業への献身 製缶事業のスキル 語学の学習	水産業で起業 米国方式の事業化 異文化との交渉スキル	重工業事業への展望 中国・ソ連への関心	米国技術への的確な評価 中国・ソ連との交渉	多彩な国際人との交流
		東洋水産に就職 油差別で舌を鍛える メキシコに派遣 米墨スパイ疑惑	現場重視 米国の実力を知る 国家間問題の認識	広大な満州への魅力	米粒に情報を記載 政治的取引スキル	米国技術の評価 国際的交渉力
			カムチャッカで製缶事業 東洋製罐の設立	財界人脉の形成	孤高のリーダーシップ	共産圏を知る孤高の財界人
				戦争で鉄入手が困難に 満州で鉄生産を手がける 満州重工総裁 軍部の圧力で事業は停滞	情報収集スキル 残留日本人の代表へ 従来の既得権益から自立	異色の保守党政政治家
					残留日本人の代表へ 帰国後は米国技術を導入 佐久間ダム事業	中国・ソ連との交友 米国との交友 ダム水没者との交渉
						鳩山内閣閣僚 AA会議への参加 日中LT貿易 北洋漁業交渉

図3 高崎達之助のマトリックス履歴書

ス履歴書については、画像関連学会の講演論文[8]に記述しているので詳細はそちらを参照していただきたい。

戦時中、高崎は満州重工業の総裁であったが、日本が戦争に敗れ国家の保護を失った外地で日本人の中心に立たされた。ソ連、中国共産党、中国国民党という異なった国家の軍隊と対峙し、終始毅然たる態度を失わない日本人は少なかったが、高崎はその中でも在留邦人に最も信頼され、その後の二年間異なった外国勢力との交渉に当たり在留邦人を帰国に導いた。帰国後の高崎は敗戦国で外国と交渉が出来る希有な国際人として日本の産業界から囑望され、日本の復興のために米国、ソ連、中国との交渉に当たった。多くの財界人が米国一辺倒であったのに対し、高崎はソ連、中国という共産圏との交渉にも当たり、共産圏に多くの友人を得た。周恩来、フルシチョフ、ナセルといった、資本家から距離を置く政治家や革命家とうち解けた友人となり得たのは、異境にあって孤独に耐え自己の信念を貫ける人物であったためであろう。

デイヴィッド・リースマンは、彼の著書の”孤独な群衆”[9]においてこのような孤独に耐え自己の信念を貫ける人間を「自律型」の社会的性格として位置付けている。この性格は先に述べた千利休、福澤諭吉、津田梅子にも当てはまると思われるが、異文化に興味を持ち理解しようとするためには基本的に必要とされるものであろう。

## 3. 西洋文化受容のマトリックス表現

### 3.1 基本的アプローチの考え方

マトリックス履歴書の考え方は、履歴書だけでなく緩やかに変化する時系列的な情報一般に適用可能と思われる。緩やかな変化を意味的な段階で区分した期間とし、区分した期間に関する相互の関係を記述可能とするからである。ここではその試みとして、西洋の文化と日本の文化が出会った場面を対象に分析を試みる。

日本と西洋が最初に直接出会うのは、ポルトガル船の種子島への漂着事件であろう。それ以前もシルクロード、中

国経由で西洋の文化が伝えられてはいたが間接的なものであった。安土桃山時代のマトリックス表現を図4に示す。

### 安土桃山時代における西洋文化受容

項目	先行期	導入期	発展期	円熟期	完了期
年代	1520～1540	1540～1560	1560～1582	1582～1600	1600～1638
権力状況	室町幕府の衰退	戦国大名の割拠	織田信長の進撃	豊臣秀吉の支配	徳川幕府の支配
軍事状況	上層の農民の士族化	武士階級の拡大	下克上で有力武士が台頭	刀狩りで大衆は非武装化	諸国の大名を支配
工芸技術	都市における分業化	鉄砲の伝来・日本での試作	堺に鉄砲工場		
産業生活	自営農民の成長	農民と大名による組織化	新たな支配被支配関係	五人組・十人組制度	新旧キリスト教の対立
商業流通	堺の発展	堺の発展	堺の発展	南蛮貿易	キリスト教の禁令
文化状況	南北朝・室町文化の進展	キリスト教の伝来	茶の湯が支配層の文化となる	キリスト教と伝統文化の対立	
	応仁の乱による社会的混乱 室町幕府の弱体化 土一揆・一向一揆の勃発 貿易商業都市としての堺の発展	利休が茶の湯の改革に取り組む 種子島への鉄砲の伝来 ザビエルの鹿児島到着 ザビエルの国内布教 利休が茶の湯の改革に取り組む ルイス・アルメイダ病院建設 播磨間の戦い	信長入京 幕府の廃止 一向一揆を制圧 堺が鉄砲生産拠点となる 印刷技術の渡来 天正遣欧使節出発 大村純忠、高山右近入信 茶の湯が支配層の文化となる	信長入京 摂津・和泉に矢銃を科す 比叡山の焼き討ち 安土城の造営・教会併設 本能寺の変と信長の死 秀吉關白に任ぜられる 太閤検地 大阪城・聚楽第の造営 山崎の戦いでの秀吉の勝利 秀吉の全国支配 宣教師追放令 太閤検地と刀狩り 朝鮮出兵 五人組・十人組制度 秀吉の死	長崎でキリスト教徒26人処刑 長崎でキリスト教徒大量処刑 コレジオ・セミナリオの発展 スペイン無敵艦隊敗北 北野で大茶会 コレジオ・セミナリオの発展 家康征夷大將軍 島原・天草の乱 出兵への反省 関ヶ原の合戦での家康の勝利 江戸幕府開設 大阪冬の陣・夏の陣 キリスト教徒の大量処刑と追放 鎖国令 島原・天草の乱

図4 安土桃山時代のマトリックス表現

西洋文化と日本文化の接触にはある種のパターンが感じられる。そのようなパターンに対しては「歴史は繰り返す」という諺でも知られているが、その繰り返しパターンから歴史の必然性を読み取るのが歴史観であろう。ヘーゲルやマルクスの弁証法は、そのパターンに端を発するものである。

西洋文化と日本文化の接触は、基本的に西洋文化を日本が受容するというパターンであろう。日本文化が西洋文化にインパクトを与えるような事例は殆ど存在しなかったと思える。日本が西洋に影響を与える可能性は今後の重要な課題であるが後に考察する。

西洋文化を日本が受容するパターンを下記のように想定した。

- (1) 先行期：日本社会としての停滞や混乱が続き、新たなインパクトを待ち受ける
- (2) 導入期：海外からのインパクトにより、社会全体が緊張し、インパクトを受け入れる。
- (3) 発展期：インパクトが徐々に国内で進展し、経済的な発展をもたらす。
- (4) 円熟期：インパクトが国内に普及すると共に、日本の伝統的な文化が台頭しはじめる。
- (5) 完了期：日本の伝統的な文化の勢力が力を得て、インパクトをもたらしたグループを駆逐し、社会が停滞する。

なおこのパターンは、私が純粹に考案したものではなく、外国人のアイデアに基づいている。パートランド・ラッセルは、1922年に『Problems of China』という著書を発行し、当時の中国の問題について彼独自の分析を試みている。この書籍は、1970年に日本語の翻訳が出版された

が、そこに上記のパターンに近い内容が記述されている[10]。

### 3.2 安土桃山時代

安土桃山時代は、日本の歴史において非常に興味深い位置付けにある。西洋における中世から近世への移行は、ルネッサンス、地理上の発見、宗教改革といった事象がエポックになっている。これはカトリック教会が支配した停滞社会としての中世封建社会が内部から崩壊して新しい時代に展開した状況を物語る。日本の近世も中世の封建社会が崩壊したかというところではなく、鎌倉時代という武士が権力を握った時代の支配構造が変化したことに起因すると思われる。農機具の改良や灌漑設備などによる農業生産の向上が、農家の貧富格差を生み、上層の農民が地域の支配権力と結びついて、権力構造を変えていったというのが歴史の背景に存在すると思われる。

そのような変化のポテンシャルを背景として、鉄砲が伝来して軍事技術が革新され、鉄砲を有効に活用して組織化したグループが室町幕府が政治権力を失った戦国時代を勝ち進んだ。鉄砲を有効に活用するためには、その技術を持っているスペインやポルトガルと上手に付き合う必要がある。そのためには彼等の精神的支柱であるキリスト教を受け入れる必要があり、軍事組織の強化のためにはキリスト教の国内の布教にも協力する必要がある。織田信長、豊臣秀吉はそのようなイデオロギーで成功した権力者の一例に過ぎないであろう。そのような社会変化のメカニズムを反映させるために、権力状況、軍事状況、工芸技術、民衆生活、商業流通、文化状況という項目を設け、各々の時代区分に応じて特徴などを記述可能とした。

歴史の進展は、知識の拡大に伴う知的な進歩と考えることが可能である。この考え方の代表はドイツ観念論哲学者

のヘーゲルである。現実の世界は様々な矛盾があるが、それらが止揚される過程を理性による社会の進歩として捉える彼の哲学を歴史的プロセスに反映させたものである。だがその視点で従来の世界の歴史を東洋世界、ギリシャ、ローマ、ゲルマン、キリスト教、中世、近世という系列で論じる彼の歴史観には無理がある[11]。ヘーゲルの弁証法を唯物論の立場で解釈し直し階級闘争の視点で見直した歴史観がマルクスの唯物史観である。技術進歩が生産力を向上させ富を増大させ、その結果生産関係が変化する。その変化の観点から、古代、中世、近世といった歴史の解釈を試みたものである。歴史の進歩の一面を捉えてはいるが、この解釈で個々の民族や国家の歴史を説明し尽くせる訳ではない。

異文化の出会いや衝突が実際の歴史であり、安土桃山時代もそのような異文化交流のコンテキストで捉える必要が

ある。さらにその歴史を背景に生きて個々人が、歴史の事実を雄弁に語るエビデンスである。千利休は、この時代を積極的に生きて日本の文化に貢献した歴史の代表者として位置付けることが可能であろう。

### 3.3 明治維新

明治維新は、非西洋国家の日本が経済的に離陸して世界で最初に西洋並になった歴史のトリガーとして位置付けられ、途上国の経済発展を考える上での歴史的エポックとして注目され続けている。従って明治維新とその先行過程としての江戸時代については、多くの研究がなされている[12]。

図5にマトリックス表現を示す。明治維新のプロセスは、ヘーゲルが語るような理性の進歩とは到底言えないで

明治維新における西洋文化受容

項目	先行期	導入期	発展期	円熟期	完了期
権力状況 軍事状況 工業技術 市民生活 商業流通 文化状況	1840～1868 徳川幕府の衰退 欧米からの軍艦武器の輸入	1868～1889 明治維新政府 欧米からの教育・技術導入 欧米からの教育・技術導入 地租改正・廃藩置県	1889～1911 明治国家 富国強兵策 殖産興業政策 市町村制 三越百貨店 和魂洋才	1911～1925 大正デモクラシー 建艦競争 鉄道、造船、航空技術等の進展 都市は発展したが地方は貧しい 震災後の築地市場の設置 白樺派・プロレタリア文学	1925～1945 軍国主義の進展 性的には世界トップレベル 産官学一体の生産体制 国家統制下の生活 国家統制下の流通 国粹主義の台頭
天文方・監書和解御用 ペリー来航・日米通商条約 尊皇攘夷運動 薩英戦争・4国艦隊下関砲撃 福澤の慶應義塾 大政奉還	東京大学	征韓論・西南戦争 新島襄の同志社 帝国憲法の発布	帝国大学での一流人材育成 中国をめぐる米國と対立	私学がサラリーマン養成 国際連盟参加 米騒動	学問の自由は失われる 太平洋戦争 2・26事件 日独伊三国同盟
主政復古 義務教育 徴兵制 岩倉使節の欧米調査 征韓論・西南戦争 自由民権運動 札幌農学校	日英同盟 津田梅子の津田塾 帝国憲法の発布 帝国憲法の発布 教育勅語 軍人勅諭 不平等条約の改正 日韓併合 隈板内閣-政党政治の発端 内村鑑三・不敬事件	日英同盟 津田梅子の津田塾 帝国憲法の発布 帝国憲法の発布 教育勅語 軍人勅諭 不平等条約の改正 日韓併合 隈板内閣-政党政治の発端 内村鑑三・不敬事件	日英同盟 津田梅子の津田塾 帝国憲法の発布 帝国憲法の発布 教育勅語 軍人勅諭 不平等条約の改正 日韓併合 隈板内閣-政党政治の発端 内村鑑三・不敬事件	羽仁もと子の自由学園 国際的地位の向上 普通選挙法施行 国際連盟参加 政友会内閣	大政翼賛会 配属将校による軍事教練 学徒動員 国際連盟脱退 政党内閣の終焉
	帝国憲法の発布 帝国議会の招集 内村鑑三・不敬事件 日清戦争 社会民主党結成・即日禁止 日露戦争 鉄道国有法 平民社 大逆事件	帝国憲法の発布 帝国議会の招集 内村鑑三・不敬事件 日清戦争 社会民主党結成・即日禁止 日露戦争 鉄道国有法 平民社 大逆事件	帝国憲法の発布 帝国議会の招集 内村鑑三・不敬事件 日清戦争 社会民主党結成・即日禁止 日露戦争 鉄道国有法 平民社 大逆事件	普通選挙法施行 対中21箇条要求 日本共産党結成 シベリア出兵 狭軌鉄道技術の推進 治安維持法制定 第一次大戦参戦 国際連盟参加 ワシントン軍縮会議 狭軌鉄道技術の推進 戦艦・重巡洋艦の建造に自信 正式航空母艦の開発 関東大震災・朝鮮人大虐殺 普通選挙法施行 治安維持法制定	統帥権干犯問題 滝川事件 日中戦争 ノモンハン事件 満鉄経営 国際連盟脱退 ロンドン軍縮条約 戦艦大和・武蔵の建造 真珠湾奇襲
					世界恐慌 満州事変 満州国設立 2・26事件 日独伊三国同盟 零戦開発で航空機技術に自信 第二次世界大戦

図5 明治維新のマトリックス表現

あろう。ペリーの砲艦外交に端を発して、幕府旧守派と尊皇攘夷派のイデオロギー闘争を通じて、大政奉還による幕府から西南雄藩への権力の移譲ということである。

安土桃山時代と同様に社会的な先行条件があり、それに対してペリーの来航がインパクトになったと言える。その先行条件は、隣国清におけるアヘン戦争に代表される列強の振る舞いであり、下級武士を中心に支配権力としての幕府に対して危機感と不平不満が向かったと言えるであろう。尊皇攘夷運動は、その危機感と不平不満が集約されたものであったが、薩英戦争や四国連合艦隊の下関砲撃の結果、彼等下級武士は攘夷を取り下げて積極的な開国論者に変わっていった。

排外主義的な保守主義的なグループと外国文化を積極的に吸収するグループとの対比は、アーノルド・トインビー

が「ゼロット」と「ヘロディアン」の対立としてモデル化し、フランク・ギブニーがその問題を論じている[13]。社会変化の多くは、「ゼロット」と「ヘロディアン」が和解することなく、闘争が継続し混乱が長引くが、明治維新においては、ゼロットであった吉田松陰の門徒が薩英戦争や四国連合艦隊の下関砲撃の結果、雪崩を打ってヘロディアンへと変化しているのである。その典型例として、伊藤博文と坂本龍馬が挙げられている。その点に関して、福沢諭吉は終始一貫した思想を持って西洋文化に対処していた。

「ゼロット」と「ヘロディアン」の対立は、水面下では継続し、教育勅語の内容に関する議論となって顕在化した。伊藤博文が提案した教育儀に対して儒学者の元田永孚(もとだながさね)教育儀付議で反論し、その議論が対立したのである。ヘロディアンの伊藤博文対ゼロットの

元田 永孚という構図に見えるが、西洋文化対儒教文化というとりえ方も可能であろう。

教育勅語の思想は、天皇を家長とする家の思想を民族・国家のレベルで道徳・倫理として実践することを要求するもので、西洋の近代国家とは相容れない思想・制度である。明治維新を推進した維新政府の主要人物は以前ゼロットであった人物と言えどもヘロディアンであったと言える。しかし、伝統勢力も根強く、物質的な文化は西洋文化の導入を認めても、精神的には反発した「和魂洋才」と言う思想も根強かった。

戦前の日本は、結果的に「和魂洋才」の文化・制度が日本の陸軍による満州・中国への侵略、暴走を止めることができずに軍国主義化し、第二次世界大戦で壊滅的な状況を招いてしまったと言えるであろう。

福沢諭吉は、民間人としてのヘロディアンであり、日本への西洋文化の受容に貢献した人物と言える。彼の創設した慶應義塾大学は、官僚養成の帝国大学に対して日本の企業経営者を多数育て、日本の国力増進に貢献したと言える。津田梅子は、帰国子女として国のために尽くす志を抱いて津田塾を創設し、女性の知識人を育て、日本社会における西洋文化の受容に貢献した。

### 3.4 戦後の民主化

戦後の民主化はポツダム宣言の受諾による無条件降伏が出発点であった。日本の降伏は、当時の大多数の国民にとっては死の恐怖への終了であり、将来の生活を真剣に考えるきっかけになったという話を聞かされた。図6は戦後の社会の経過をマトリックス表現にまとめたものである。

### 戦後における欧米文化受容

項目	先行期(戦中)	導入期(占領期)	発展期	円熟期
年代	1940～1945	1945～1951	1951～1990	1990～2015
権力状況	戦争遂行政府	GHQによる施政	混乱から自民党政権へ	短命政権から安倍政権へ
軍事状況	純戦の勝利から敗北へ	武装解除	冷戦に対する自衛隊の整備	冷戦終了後の自衛隊の進展
工業技術	戦時軍事技術の進展	壊滅状態から復興へ	技術導入による発展	優れた技術だが利益を生まない
市民生活	限界生活	最低生活から発展	生活水準の劇的向上	生活の格差が増大
商業流通	戦時統制経済	やみ米など	米国を真似た効率的流通へ	通関・宅配などの進展
文化状況	自由の無い国粹主義	欧米の民主主義の導入	衣食足りても礼節は劣化	不寛容な社会へ
	真珠湾奇襲 中国・朝鮮・アジアへの侵略 日本の連合艦隊の敗北 B29による戦略爆撃 広島・長崎への原爆投下 ポツダム宣言の受諾	東京裁判での戦犯受け入れ  米軍への基地の提供	日韓、日中の国交回復 大形タンカーの製造と輸出 ベトナム戦争への基地提供 原発の推進	靖国神社問題 慰安婦問題・ヘイトスピーチ  米軍への協力体制の議論 福島原発の被害 歴史修正主義の台頭
		マッカーサーの進駐 平和憲法の制定 教育制度の民主化 思想信条の自由 報道の自由 農地改革 労働運動・農民運動 朝鮮戦争へ基地提供	自衛隊の社会的定着 教科書検定制度の議論  記者クラブによる自主統制報道 食糧管理制度と減反政策 安保改定反対運動 ベトナム戦争への基地提供	閣議決定による憲法解釈議論 教育委員会による統制 国旗国歌の法制化 マスメディアによる報道の自粛 米価自由化 大衆運動の孤立化 湾岸戦争への資金提供
			テレビ放送開始 国連加盟 教育委員会の任命制 原子力平和利用 安保改定反対運動 所得倍増計画 東京オリンピック 新幹線開業と普及 学園紛争 オイルショックの克服 ワープロ・オフィス電子化 自動車・家電産業の躍進 高速道路網・モータリゼーション 電電・国鉄の民営化	教育委員会制度の劣化 福島原発の被害 自衛権の拡大 世界2位のGDPの凋落 再度の東京オリンピック期待 リニア新幹線の計画 大学の就職予備校化  ネット社会の米国支配
				市場の寡占化 バブル崩壊 湾岸戦争への資金提供 少子高齢化問題の顕在化 インターネットの普及 国旗国歌の法制化 ショッピングモールの発展 地域商店街のシャッター街化 個人情報保護法 東日本震災と福島原発被害 特定機密法

図6 戦後社会のマトリックス表現

先ず高校時代に漢文を教わったK先生のエピソードを紹介する。それまで「国のために死ぬ」と教えていた国民学校の教師が、8月15日を境にして、教科書に墨を塗りながら「これからは民主主義の世の中だからみなさんは自分の意見を主張しなければいけない」と話し始めたのを聞いて、その変わり身の早さに日本社会が信じられなくなったとのことであった。要するに日本の学校の教師は上から指示されたことを教えることしか許されず、生徒は言われたことにカメレオンのように従うことしかできなかったのである。それを語ったK先生は、「そのような教師にだけはなりたくないと思って君たちを教育している」と話してくれた。この上意下達の思想は儒教に基づいており、支配する人間にとっては都合の良い思想であった。戦後の占領軍の

改革は、このような儒教の思想から日本の国民を解放する試みであったと言えるであろう。

平和憲法の成立の経緯は、最近の解釈改憲の議論などを通じて人々に知られるようになった。特に憲法九条の非武装、交戦権の否定の文言は、世界に類を見ないものであり、世界平和を指向する先進性を賞賛する意見と、非現実性を危惧し批判する意見が成立以来続いている。この条項は、天皇制の存続のためにマッカーサーが加えたという意見が主流のようだが、マッカーサーは時の総理大臣の幣原喜重郎が提案したと述べている。戦前のワシントン会議やロンドン会議で軍縮に取り組んだ幣原は、戦争の廃止を強く希求した人物であったようで、彼から提案されたとして

も不思議はないようだ。特に核兵器の登場で、国際世論の支持が得られない無謀な戦争は制度的な国家では事実上不可能であり、日本の平和憲法の思想は現実性を帯びてきた面もある。

日本の民主主義がどの程度のものであるかを最近痛感させられたエピソードがある。5月21日～23日にスペインのバレンシアで異文化教育訓練および研究に関する欧州の国際会議（SIETAREuropaCongress）があり、福島における女性起業家の育成に関する研究発表をしてきたが、その際に福島に関連する問題として日本の政府の情報隠蔽に関する議論があった。これは講演の際ではなく、その後のカクテルパーティでの会話であった。政治的な面があるので答えにくい内容であったが、ドイツのジャーナリストに対して日本の外務省が記事内容を批判したことなどが影響していたようである。

さらに英国人のルイス卿によるワークショップでも、日本文化の問題を取り上げた。それによると

- (1) Poor linguistics – 言語不得意
- (2) Face protection, honour – 名誉・面子重視
- (3) Ultra-courtesy – 超礼儀正しさ
- (4) Age-based hierarchy – 年功序列
- (5) The company (kaisha) is sacred – 会社は神聖
- (6) Long termism – 長期的経営指向

とのことである。この内容は彼の著書でも紹介されている[14]。以上の項目から、ルイス卿の目には儒教精神が根強く認識されていることが分かる。彼は日本での5年間の滞在経験を有し、日本の異文化コミュニケーション学会とのコンタクトに関心を持つ親戚家であるが、遠慮しないで現状の日本の特徴を述べると上記のとおりなのである。戦後70年を経ても西洋文化は定着してはいないということである。

## 4. 考察

### 4.1 西洋文化の受容パターン

以上、安土桃山時代、明治維新、戦後の民主化について述べたが、日本社会が西洋文化を受容する経緯には以下のような類似性があると感じられる。

- (1) 積極的に受け入れるグループ（ヘロディアン）と、受け入れに抵抗するグループ（ゼロット）があり、当初は受け入れグループが主流を占めるが、3～4世代後は抵抗グループが主流になる。安土桃山時代は、鉄砲伝来から90年後に鎖国令が出ている。明治維新の場合は、ペリー来航から92年後に第二回大戦の敗戦を迎えている。戦後の民主化は今年が70年であるが、民主化の象徴であった憲法が懸念される状況になっている。
- (2) 積極的に受け入れるグループは、西洋の技術習得に関心があり、その習得が終わると勢力が弱まる。安土桃山時代は、鉄砲の伝来が軍事的な盛衰に直結し、それを有効活用した織田信長が緒戦の勝利をものとした。その後、秀吉がその成果を受け継いだ。天下を平定した後は、刀狩りを行い、民衆が武器を持つことを禁止した。対抗勢力が武器を持つことを恐れたからである。キリスト教の禁教も、

イデオロギーを恐れるだけでなく、外国から武器が輸入されることの危険を排除するためでもあった。

(3) 西洋文化の象徴であるキリスト教は、技術の習得に際して必要な範囲で受け入れるが、その後は伝統文化の儒教が支配的になり、活発で自由な人間の育成を阻んだ。安土桃山時代は、千利休に象徴されるオリジナリティ溢れる興味深い人材が生まれた。キリシタン大名や天正少年使節のように海外に飛躍する人物も登場し、日本と海外との交流も盛んになりつつあった。特に東南アジアでの日本人町の発展は、今日の日本の状況を彷彿させるものがある。しかし、その後の鎖国政策により、その活動は途絶えてしまった。

(4) 西洋文化を積極的に受け入れるグループは、安土桃山時代は鉄砲を代表とする軍事技術、明治維新は産業革命を起こした蒸気機関、鉄道、電気、通信、化学、造船、建築などの工業化技術、戦後はエレクトロニクス、物性材料、情報通信、バイオなどが挙げられるであろう。

以上のように、日本社会が西洋文化を受容する際は、異なる時代を超えて非常に類似の状況が観察されることが明らかである。

### 4.2 時系列情報の構造化

3.1節で、マトリックス表現の、履歴書情報からの拡張、すなわち一般的な時系列情報に対する適用可能性を述べたが、その問題について考察する。従来から下記のような数学的手法が確立されてきた。

- (1) 時系列情報については、シャノンの情報理論が符号化の観点から数学的なモデルを提供し当学会では一般的に知られている。
- (2) 古典的には振動理論などの機械工学分野、さらに振動理論にフィードバック理論を追加した古典制御理論分野で扱われてきた。
- (3) ノーバート・ウィーナーのサイバネティクスは情報理論とフィードバック理論を包含する数学体系を構築した。
- (4) 現代制御理論は、多次元空間におけるベクトルマトリックス微分方程式による解法を確立し、時系列処理を状態空間に位置付けた。
- (5) ベルマンのダイナミックプログラミングとポントリヤギンの最大原理により、現代制御理論に最適制御の考え方が追加された。

自然言語処理も下記のように考えると構文解析を適用する時系列信号の処理である。

- (1) パーサを用いて語を抽出し、文法に基づいて意味を把握する。
- (2) 意味は構造でありチョムスキーの理論における深層に相当する。
- (3) 深層の構造が共有されることにより、意味情報の伝達が実現される。マトリックス表現の原理は、チョムスキーの深層に近い概念である。

例えば、図7のような履歴情報を想定する。この履歴は、A B C Dというカテゴリの項目群で構成される。

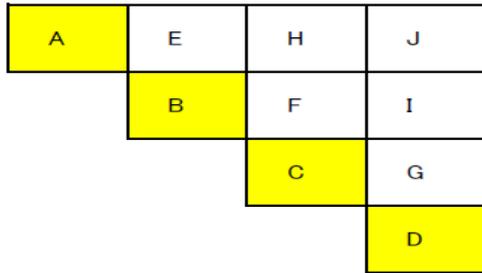


図7 抽象マトリックス履歴表現

Eは、AとBとに共通する項目群であり、FはBとCとに共通する項目群である。このように関係づけを勤めると、AからDまでの時系列情報で構成されるマトリックス履歴は図8のようなクラス階層で記述することができる。

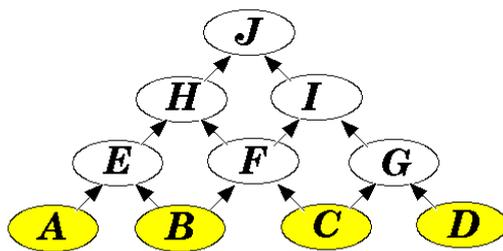


図8 抽象マトリックス履歴表現のクラス階層

この手法は、今すぐ使える手法ではないが、徐々に変化するような時系列情報の意味的な管理に活用可能な基本的な枠組みである。例えば、人材育成にあたり、優秀な人材の育成パターンが得られるなら、その類似パターンを抽出するような用途に適用可能であろう。さらに歴史は繰り返すようなパターンが抽出できれば、同様のアプローチを取ることが可能になるかもしれない。クラス階層の実装は、多重継承を必要とすることから、OWLかCLOSが候補になるが、実装の容易さの点でCLOS (Common Lisp Object System) が最適であろう。今後の課題として検討したい。

## 5. おわりに

以上、これまで起業家人材の育成の研究で用いてきたマトリックス履歴書を、歴史過程の評価に用いることを試みた。安土桃山時代、明治維新、戦後の民主化という3種類の時代を取りあげ、日本が西洋文化を受容した過程の分析を行った。その結果、従来把握されていなかった歴史的な

パターンの分析に資することができたと考える。さらにマトリックス表現は、時系列情報を構造化して記述可能なので、オブジェクト指向分析やオントロジ活用におけるクラス階層に対応付けた活用も可能ではないかと思われ、簡単な分析を試みた。

最後に、本報告は異文化コミュニケーション学会での議論、特にバレンシアで開催されたSIETAR Europa Congressでの日欧文化交流に関する多様な議論を通じて思いついたアイデアが発端になっている。関係者に謝意を表すと共に、異文化交流分野と情報処理分野との融合を通じた新たな研究分野の創出に寄与することを期待したい。

## 文献

- [1] 大野邦夫, 西口美津子; "マトリックス方式による職歴情報の評価とキャリア設計の検討", 情報処理学会研究報告, DD89-7 (2013.2)
- [2] 大野邦夫, 西口美津子; "地域コミュニティの再生に貢献する人材育成に関する検討", 情報処理学会研究報告, DD91-2 (2013.9)
- [3] 大野邦夫, 西口美津子; "日本における女性起業家のスキルに関する一検討", 情報処理学会研究報告, CLE12-2 (2014.1)
- [4] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子, 末永早夏; "異文化交流スキルを有する女性起業家に関する研究", 情報処理学会研究報告, DD97-1 (2015.3)
- [5] G・ホフステード (岩井紀子・岩井八郎訳); "多文化世界 - 違いを学び共存への道を探る", 有斐閣 (1995)
- [6] 若桑みどり; "クアトロ・ラガッツィー~天正少年使節と世界帝国(下)", 集英社文庫, 集英社, pp. 216-221 (2008.3)
- [7] カール・マンハイム (鈴木訳); "イデオロギーとユートピア", 未来社 (1968)
- [8] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子; "工業化および情報化を背景とする社会的起業家人材の育成", 第1回画像関連学会連合会大会講演論文 (2014.11)
- [9] D・リースマン (加藤秀俊訳); "孤独な群衆", みすず書房, (1964)
- [10] B・ラッセル (牧野力訳); "中国の問題"; 理想社, pp.100-111, (1970)
- [11] ヘーゲル (長谷川宏訳); "歴史哲学講義(上・下)", 岩波文庫, 岩波書店 (1994.8)
- [12] 永井道雄, M・ウルティア編; "明治維新", 国連大学 (1986)
- [13] 永井道雄, M・ウルティア編; "明治維新", 国連大学, pp.128-153 (1986)
- [14] Kai Hammerich & Richard D. Lewis; "Fish Can't See Water - How National Culture can Make or Break Your Corporate Strategy", John Wiley & Sons, Ltd. (2013)